

『坂崎出羽守』

作詞 渡辺緑草／作曲 松岡旭岡

怒涛の如く押し寄する悲憤に胸は猛れども世は権門の岩堅く砕けて浪の花と散る

頃は元和元年夏五月茶白山なる本陣には葵の紋の幔幕に大将徳川家康が

麾下の武將ら一同と軍議に耽る折しもあれ物見の兵は馳せ来たり

「幸村はじめ諸大将枕を並べて討死し大坂城は火に包まれ早や二の丸も焼け落ちて

千姫お座す本丸も既に危く候」と聞くより家康打ち案じ満座の諸將を見渡して

「誰かある姫をば救い出すべき勇士はなきか」と呼ばれど猛火に恐れて一同は顔を見合はすばかりなり

その時坂崎出羽守進み出で「某が一命かけて姫君をお救ひ出し申さん」と言へば家康打ちよろこび「汝は真の勇士なり救ひ出せし其の折は姫をば汝に与へん」と

聞くより坂崎勇み立ち馬上にひらりと打ちまたがり本丸さしてまっしぐら

馳せつけみれば時既にさしも名だゝる名城も黒煙もうもう渦巻きつ

燃え立つ猛火ものすぎきその只中をもものともせず馬より飛び下り馳せ入りて

「千姫君はお座さずや姫はいずこ」と呼ばりつ奥殿深くこゝかしこ

探し求めて漸うに見つけ出せし千姫は煙に咽び倒れ伏し今は呼吸も絶え絶えに

髪も乱るゝ綾衣絵にも筆にも写し得ぬ其の美しき姿にはさすが武勇の坂崎も

暫しためらひ居たりしがかくてはならじと肩に負ひ降り来る火の粉払いのけ

崩れし焼木踏み越え踏み越え首尾よく助け出せしも出羽は全身傷つきて

顔の半面焼けたぐれ過ぎて返らぬ傷のあと

男心の一筋に家康の言葉信じつゝ姫は己の妻なれと思ひし事も仇なれや

今宵本多忠刻に嫁ぎ行くなる千姫を思ふにつけて己が顔醜き様は誰が為ぞ

かくなりつるは誰が故ぞあな味気なの世の中やせめて愁を払はんと酒を命じて坂崎が

飲めど重ねど今日のみは心あやなく晴れやらぬ秋の日暮の庭の面乱れて咲くや萩桔梗

菊も哀れと鳴く虫の細々悲しき声聞けばそこはかとなく迫りくる物のあはれの身に沁みて

木覚の涙あふれ来ぬ

折しもあれや告げ渡る諸行無常の鐘の音に秋の夜寒く更けて行く